

〔編集後記〕

千葉医学雑誌86巻4号には、原著論文1篇、症例報告2編、研究紹介1編、海外だより1編、千葉医学会例会報告1編を掲載させていただきました。

整形外科の鈴木崇根先生と國吉一樹先生の原著論文「Evaluation of Grip and Pinch Strength Difference between the Dominant and Non-dominant Hand in Healthy Japanese Adults」では、手の機能評価に重要な握力とピンチ力の利き手と非利き手間の関係について調査した結果が報告されています。握力、ピンチ力とも有意に利き手が高く、手の機能評価には、単純な健側との比較よりも健側から予想される患側の握力とピンチ力の正常値と比較することが重要であると結論付けられています。

JFE健康保険組合川鉄千葉病院外科の青柳智義先生他の症例報告「胃癌と男子乳癌の同時性重複癌の1例」は本邦では7例の報告例しかない稀な症例であり、男子乳癌の重複癌として消化器病変を念頭におく必要のあることが強調されています。

匝瑳市民病院外科の中田泰幸先生他の症例報告「Ball valve syndromeを呈した体中部の無茎性胃癌の1例」は、胃の腫瘍性病変が十二指腸に脱出し、幽門を閉塞する病態がBall valve syndromeと定義されており、胃体中部に発症した無茎性胃癌がこのような症候を呈することは極めて稀と報告しています。

研究紹介では船橋伸禎先生他による「循環器画像診断部門」が紹介されています。循環器内科の旧第三内科時代からの教室のメインテーマである循環器の画像診断について、最近の活動と研究成果が詳細に報告されています。今後、画像診断を基盤として、千葉大学の基礎、臨床各教室で行われている基礎研究及びトランスレーショナルリサーチへの発展も期待されます。

海外だよりは循環器病態医科学大学院生の高岡浩之先生の「Stanford University留学記」であり、研究紹介の「循環器画像診断部門」にも最新の画像診断技術の臨床研究のために留学していることが記載されています。スタンフォード大学はカリフォルニアにある私立の名門校です。放射線科の循環器領域診断部門に留学されており、同科にはそれ以外にも10程度の部門があり、それぞれに教授がいて独立していることが報告されています。私事になりますが、30年近く前に私もスタンフォード大学の放射線科に留学していました。写真1のスタンフォード大学正門は当時のままで、懐かしい写真です。私は放射線生物学部門に所属していたのですが、それ以外には放射線診断、放射線治療、RIなどの部門しかなかったように記憶しています。当時は悪性リンパ腫の放射線治療で有名なヘンリー・カプラン教授がご存命であり（退任はされていたようですが）、放射線治療部門に勢いがあったように思います。

学会は、整形外科例会の抄録が収載されています。症例報告から先端的研究まで多彩な発表が行われており、診療、研究活動の充実が伺われる内容です。

千葉大学医学部八十五年史によると千葉医学会は大正11年（1922年）に創設され、初代会長に当時の千葉医学専門学校長であった三輪徳寛博士がなられたとあります。大正12年より隔月で千葉医学会雑誌が発行され、本号で86巻4号となりました。八十五年史には、関係者のご努力により創設され、更にそれが発展、維持されてきた経緯が記述されています。千葉大学医学部が創立135年を経て、千葉医学会の80年以上の伝統を踏まえて、千葉医学会、千葉医学雑誌が更なる発展を遂げるために、我々にも先達同様或いはそれ以上の努力が求められている。

（編集委員 田邊政裕）